

## 第 33 回国際心理学会議 (The 33rd International Congress of Psychology)

言語聴覚学専攻 松尾 加代

国際心理学会議 (International Congress of Psychology) は 4 年に一度行われる世界最大規模の会議であり、今回は第 33 回目の開催となった。世界各国で開かれており、日本では 2016 年にパシフィコ横浜で第 31 回の会議が行われた。第 32 回は 2020 年にチェコで開催予定であったが、コロナ禍のため延期となり、翌年の 2021 年にハイブリッドでの開催となった。そして、2024 年 7 月 21 ~ 26 日に第 33 回の会議がチェコのプラハで対面で開催された。6 日間の会期で、おそらく 3000 件以上の研究発表が行われたと推測する。発表者の名前、演題タイトル、発表日時のみが記載されたプログラムでも 92 ページあった。今回、私はポスター発表を行った。学会でのポスター発表の場合、発表者の在席責任時間は 60 分程度が一般的である。しかし、国際心理学会議での在席責任時間は 120 分と、通常の約 2 倍であった。そんなに長い間、同じ場所に立ち続けるのは大変だと思っていたが、想像以上に多くの方が発表を聴きに来てくださり、あっという間の 120 分だった。

今回は「視覚化型の人是最初に絵を描くことで言語化型の人より多くの目撃記憶を思い出す (Visualizers recall more eyewitness memory than verbalizers by drawing first)」と題して、認知スタイルの個人差と記憶の想起方法が目撃記憶に及ぼす影響を検討した研究を発表した。認知スタイルとは情報の獲得や処理の様式のことであり、認知スタイルの分類方法のひとつに言語化型と視覚化型がある。言語化型傾向の人は提示された情報を言語的に処理を行い、視覚化型傾向の人は視覚的に処理を行うとされる。目撃記憶とは、事

件や事故の場面を目撃した記憶、すなわち視覚的な記憶である。視覚的な記憶の場合、言語化型より視覚化型の方がよく覚えており、その結果、想起の量が多くなる可能性が考えられる。そこで本研究では、最初に言葉で (文字に書いて) 想起する条件と、スケッチで (絵を描いて) 想起する条件を設け、犯罪未遂の模擬ビデオを観た研究参加者に、目撃内容を言葉またはスケッチのいずれかで想起するよう指示した。その結果、最初に言葉で想起した場合は、言語化型と視覚化型の想起量に違いはなかったが、最初にスケッチで想起した場合は、言語化型より視覚化型の方が想起量が多くなった。本研究結果が示唆することは、一般的に警察での事情聴取は目撃者に言葉による報告を求めるが、人によっては絵を描いて報告を始める方が、より多くの記憶を思い出すことができるかもしれない、ということである。

発表を聴きに来てくださった研究者の居住国は非常にさまざまであった。中国、韓国、イギリス、カナダはもちろんのこと、普段コミュニケーションをとる機会が減多にない国々、たとえば、南アフリカ、トルコ、ウズベキスタン、セルビア、ドイツ、イタリア、スイスなど、120 分間にたくさんの国の方々と話すことができた。それは、私にとって非常に刺激的で高揚感が高まる時間となった。国際学会で、各国の研究者とひとつのテーマについて深く議論する時、自分が研究者であることに大きな喜びを感じる。これからも自分の興味のある領域で良い研究を続け、世界中の研究者と意見交換をしていきたい。

